



第1巻

第2巻

『オランダ東インド会社の創始ならびに発展』1646年版

全2巻（本学図書館所蔵）

また、この原稿は3年後の1648（慶安1）年にはイザーク・コンメリンという人物が編集し、“*Beschrijvinghe Van het Machtigh Coninckrijcke Japan*”（『強き王国日本の記事』）として、78ページの単行本で出版された。



『強き王国日本の記事（日本大王国志）』初版

アムステルダム のヨースト・ハルトヘルス社が刊行したことからハルトヘルス版と呼ばれる。（本学図書館所蔵）

これらの書物はオランダで刊行され、その後、ヨーロッパ各地で他言語に翻訳のうえ、出版された。日本では、この時期が既に鎖国体制に入っており、1720（享保5）年まで洋書の持ち込みが禁じられていたためか、通詞などによる翻訳書を見つけることはできない。結局、1948（昭和23）年になって、幸田成友訳著の『日本大王国志』が刊行され、カロン研究の原典となっている。

そこに書かれているのは、ルカルスゾーンへの報告書が完成するまで、約17年間滞在して知り得た江戸時代初期の封建体制下の事柄であり、その記述からはカロンが日本人社会の中で、様々な変化に対応していく知識を十分に備えていたものと理解することができる。

商館長就任と平戸商館の取り壊し

1639（寛永16）年、カロンは日本に滞在すること20年を経て第8代目の商館長の地位に就いた。しかし、2年前に勃発した天草の乱以降、幕府の対外政策は厳しさを増しており、カロンの商館長就任直後にはポルトガル船の来航が禁じられていた。この命に反して、翌1640（寛永17）年6月に長崎へ来航したポルトガル人61人が、幕府によって悲惨な最期を遂げていた。

こうした中、同年9月に平戸へ入った大目付井上筑後

守政重より、カロンにとって最大とも思える難題が通達された。商館の倉庫の破風に西暦年が入れられていることを理由に、即刻建物の取り壊しが求められたのである。カロンは即座にこの命に従い、同時に幕府が命じた商館長の一年交代制も素直に受け入れている。

カロンにとって、これらの命令を受けることは苦渋の決断であったと考えられるが、ヌイツ事件やポルトガル使節への対応を通じて、幕府という日本人組織での意思決定と、その展開を熟知していた彼の洞察力が瞬時に働いたと思われ、この決断が彼自身や滞日オランダ人の生命、そして対日貿易を断絶の危機から救ったのである。なぜならば、カロンの日記には‘後に知ったこととしながらも、自分の返答次第ではポルトガルと同様の処分が待ち受けていた’ことが述べられている（永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』第四輯430頁参照）。

ちなみに、イギリスは1623（元和9）年、対日貿易で採算が見込めぬことを理由に平戸商館を閉鎖しており、1639（寛永16）年には幕府が交易を許すヨーロッパの国はオランダ一国となっていた。そしてオランダ商館は1641（寛永18）年、長崎の出島に移されることになる。

離日後のカロン、コルベールに見込まれて

商館長の任期が一年になったことから、1641（寛永18）年、カロンは商館の出島移転を見届けぬまま、約23年に及ぶ滞日生活に別れを告げ帰国の途についた。帰路パタヴィアに立ち寄り、キリスト教禁制政策の一環として日本から同地へ追放されながらも生存していた彼の5人の子供を認知して、オランダ本国へ戻った。

彼は帰国後、台湾長官や商務総監などの要職を経て、ルイ14世治世下のフランスで実質的な宰相と目されたジャン・コルベールの招きに応じ、同国の東インド会社の首席理事に就任している。これは、商務総監時代にかけての不正貿易疑惑の払拭と、それに対する嫌悪感からでた行動とみられるが、フランスを追われた両親の名誉回復を意図していたのかも知れない。しかし、同僚のフランス人から疎まれることがあったようで、存分に力を発揮できない中、船舶事故によって帰らぬ人となった—若き日々を過ごした日本の土を二度と踏むことなく。

参考文献

- 幸田成友訳著『日本大王国志』（平凡社、昭和42年）
- 永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』第四輯（岩波書店、昭和45年）等

おく まさよし（司書・図書館事務長兼管理運営課長）